

函館高専 令和7年度データサイエンス・AI教育プログラム 自己点検評価

本プログラムの講義内容（認定制度の審査項目）	モデルカリキュラム対応箇所	内部評価	評価理由
数理・データサイエンス・AIは、現在進行中の社会変化（第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会等）に深く寄与しているものであること、それが自らの生活と密接に結びついているものであること	導入 1-1. 社会で起きている変化 1-6. データ・AI利活用の最新動向	A	情報社会の現状や情報の特性、進化する情報技術への理解を深めるとともに、社会における情報技術の活用事例を取り上げた講義が行われている（情報処理基礎、工学リテラシー）
数理・データサイエンス・AIが対象とする「社会で活用されているデータ」や「データの活用領域」は非常に広範囲であって、日常生活や社会の課題を解決する有用なツールになり得ること	導入 1-2. 社会で活用されているデータ 1-3. データ・AIの活用領域	A	現代の情報社会におけるデータの収集・整理・分析に関する技術およびアルゴリズムの基礎を学ぶとともに、課題解決への応用を扱う講義が行われている（情報処理基礎、工学リテラシー、工学基礎実験、プログラミング入門）
様々なデータ利活用の現場におけるデータ利活用事例が示され、数理・データサイエンス・AIは様々な適用領域（流通、製造、金融、サービス、インフラ、公共、ヘルスケア等）の知見と組み合わせることで価値を創出するものであること	導入 1-4. データ・AI利活用のための技術 1-5. データ・AI利活用の現場	A	実社会におけるデータ活用事例（ネットワーク技術等）を示しながら、表計算ソフトを活用したデータの収集・整理・解析を実践する講義が開講されている（情報処理基礎、工学基礎実験）
数理・データサイエンス・AIは万能ではなく、その活用に当たっての様々な留意事項（ELSI、個人情報、データ倫理、AI社会原則等）を考慮することが重要であること	心得 3-1. データ・AI利活用における留意事項 3-2. データを守る上での留意事項	A	情報モラルや情報化が個人に与える影響をはじめ、個人情報・プライバシーの保護、関連法規、著作物の適切な取り扱い、および情報セキュリティ上の脅威への対応について学ぶ講義が行われている（情報処理基礎）
実データ・実課題（学術データ等を含む）を用いた演習など、社会での実例を題材として、「データを読む、説明する、扱う」といった数理・データサイエンス・AIの基本的な活用法に関すること	基礎 2-1. データを読む 2-2. データを説明する 2-3. データを扱う	A	実データを用いたExcelによるデータ分析演習に加え、C言語を用いたプログラミングを通じてデータの取り扱いを理解し、実践的に習得する講義が行われている（情報処理基礎、工学基礎実験、プログラミング入門）

評価基準

- A：十分満足している
- B：満足している
- C：改善を要する

履修者数 184名
修了者数 167名（※）

※前年度の不認定者3名を含む